

文学博士藤田宏達君の「原始浄土思想の研究」に対する授賞

審査要旨

著者は、仏教の浄土思想を、従来の宗派仏教の伝統的な宗義学的理解から離れて、現代のインド学仏教学の学問的視点に立って批判的に研究しなおすという一貫した姿勢の下で、多年にわたってユニークな諸論文を発表し注目を引いていたが、本書はそれらの研究成果を集大成したものである。

本書は、序論、本論六章と結語から成っている。序論「原始浄土思想と問題の所在」(一―九頁)では、まず書題の「原始浄土思想」を「阿弥陀仏の浄土の原始期の思想」と規定し、次にこの原始浄土思想が、インドにおける大乘仏教の主要な思想の源流であるにもかかわらず、その学問的研究がいまだ本格的に行なわれていない今日、原始浄土思想はなお未開拓の分野であることを述べている。

第一章「浄土経典と関係資料」(一一―一六四頁)では、無量寿経と阿弥陀経のサンスクリット本、チベット訳、漢訳諸本に対する文献学的研究が綿密に行なわれている。中でも、漢訳無量寿経について、従来「五存七欠」という既定の事実のように称えられて来た捉え方を否定し、実際には五存経以外の訳出は行なわれていなかったと結論づけていること、また、浄土三部経として伝統的に周知されて来た残りの一経である観無量寿経を、「浄土思想に言及する関係資料」として、その他の浄土思想に言及する経論とともに取扱っていることなどが注意される。

第二章「原始浄土思想の成立」(一六五―二五八頁)では、無量寿経と阿弥陀経との諸異本の比較検討によって、そ

の「原初形態」を想定し、そこに明らかになってくる浄土思想がどの時代、どの地域に成立したかという問題を取扱っている。特に注目されるのは、この二経のサンクリット本とパーリ聖典との言語的文体的な対照研究であり、それは著者による初めての試みである。また漢訳におけるシナの変容を探る中で、五悪段を訳出の際に附加されたものと見做している推論は、学界においても予想されていた問題であるが、著者の所論にはよく推考を遂げた跡が顕著である。

第三章「阿弥陀仏の起源」(二五九～三七六頁)では、阿弥陀仏思想の起源を考究し、それを原始仏教以来の仏陀觀の流れにおいてとらえようとしている。それは注目すべき視点である。またこの問題を、菩薩思想や現在他方仏思想の上で検討している。

第四章「本願思想の構成」(三七七～四二八頁)では、阿弥陀仏の本生説話の中心をなす本願思想の思想系譜が討究され、特にインド思想一般(ウパニシヤッド、ブラーフマナ)と原始仏教や部派仏教における誓願(Kratu, prañi-dhana)思想を問題としてゐる。

第五章「極楽浄土の觀念」(四二九～五一六頁)では、「極楽浄土」の起源問題に主眼を置きつつ、その思想的意義を浄仏国土思想との関連において説明しようとしている。極楽の起源に関しては、四種類似説(転輪聖王神話、北ノ洲神話、天界神話、仏塔)をもって複合的な起源説を立てている。

第六章「実践に関する諸問題」(五一七～六一八頁)では、往生思想、念仏思想、臨終来迎思想の順序で問題が取上げられている。終りに注目すべきは、「信」の原語が詳しく調査究明されていることである。「信」の原語は、無量

寿経を中心とする浄土經典において、(1)疑に對蹠して用いられる *śraddhā*、(2)信と念仏との相即を語ろうとする *prasāda* (淨信)、(3) *adhimukti* (信解、勝解) などが枚舉せられるが、インド思想一般において、熱烈な献身的信仰を意味する *bhakti* (信愛) の語は一度も用いられていない。浄土教におけるそういう信のあり方は、原始仏教における信の実践的体系として、信↓慧(↓解脱)と言って信が慧と関係するものを伝統的に受け継いでいる。それは信の諸原語の中の *prasāda* (心澄淨としての信) を中心となすもので、仏教における信が、本来、寂靜的、沈潜的なもので、熱狂的狂信的なものでないという見方をはっきり表明している。そういう点で浄土教の信は、大乘仏教的起源に關係した重要な事項をなすのである。

結語「浄土思想の展開」(六一九〜六三〇頁)では、本書で充分な検討がなされずに残された問題点についての展開が述べられている。その中で著者によっても示唆されているが、浄土思想が、仏教思想の展開の上で、特に思想的・宗教的に深められていった仏身説の展開の上で問題とされなければならないことは今後の重要な問題であろう。

以上概観した如く、本書は、現在の文献学と歴史学の方法論的基礎に立って、参見可能なすべての浄土思想に關連する資料を涉獵・駆使しつつ、批判的にしてしかも穩健に論旨を進め、中正の立論を示している。本書のような現代の發達した学問的見地に立っての浄土思想の研究は、斯学界にとつての画期的な成果である。